



2014年10月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2014年10月
第100号

漢字点字協会の
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代表 岡田健嗣
編集責任者 木下和久



目次 〈『うか』100号記念特集号〉

『うか』百号を迎えて（岡田健嗣）	1
文字を求めて～失明者の辿った歩み（田中秀臣）	5
点訳へのかかわり（齋藤寿美子）	8
羽化の会に参加して（田中かほる）	9
『常用字解』音訳プロジェクトⅠ（平井任子）	11
『常用字解』音訳プロジェクトⅡ（藤田教子）	13
音訳グループ「やまびこ」より	17
点字から識字までの距離（94）（山内 薫）	19
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	23
ご報告とご案内	29
編集後記（木下和久）	31

『うか』一〇〇号記念特集号

『うか』百号を迎えて

横浜漢点字羽化の会

岡田 健嗣



本会の機関誌『うか』も、今号で百号を迎えることになりました。

これは言うまでもなく、読者諸兄姉の有形・無形のご支援の賜に他なりません。深く御礼申し上げます。中でも、何と申しましても賛助会員の皆様のご支援は、本会の運営に欠かせないものでございます。活動に伴います会員の負担も、少なからず軽減することができました。

本会が活動して参るに当たって、横浜市の図書館は、本会製作の漢点字書をお受け入れ下さっております。墨田区の図書館は東京での活動の拠点の一つをご提供下さっております。また横浜市社会福祉協議会と港区のヒューマンプラザは、定例会や学習会、漢点字の資料の打ち出しなどの、活動の拠点を提供下さっております。もう一つ、神奈川県民活動サポーターセンターは、本誌の印刷と製本の作業の機材と会場をご提供下さっております。このように多くの個人

・法人・公共の施設の皆様のお力に支えられて、現在に至りました。

本会は、横浜と東京に拠点を置いて活動しております。横浜並びに東京では、会員によって活動が遂行されております。その活動とは、取りも直さず漢点字書の製作であり、書物の製作工程である製版・印刷・製本を一挙に手掛けていることとなります。こう申せば、如何にも広大な事業を営んでいるように思われますが、実際は極めて小規模な、実に地味な日常的な作業です。この地味な日常的な活動こそが本会の活動の目的であり、方法であると言うことができるとさえ、私には思われます。

機関誌である本誌は、このような実態をさらに明らかにするものと位置づけられます。勿論主は活動ですが、本誌はそれに従うものに違いありません。しかしながら本誌は、その活動を考え方の面から裏付けるよう努力して参りました。なぜ漢点字が必要なのか、なぜ漢点字書の製作が求められるのか、なぜまず基本的な書籍の漢点字訳から手を付ける必要があるのか、このようなことを本誌では、繰り返し問うて参りました。このように本会の活動と本誌とは、肝胆相照らす関係であるべきと位置づけて参りましたし、それを築こうとして来たと言つてよいと考えます。それだけに

本会の活動が、今日まで滞りなく遂行されて参りましたことを顧みますと、誠に感慨深いものを感じます。

本誌を発行するに当たっては、実際にその任をお引き受け下さる方がおられなければなりません。編集・印刷・製本・発送の作業が滞ることなく遂行されるには、まずは編集の任に当たって下さる方のご尽力に負っておりますし、その後の一連の作業は、会員の皆様の手作業の連携によっております。この作業は、本会のように資金の乏しいボランティア・グループが、如何に安上がりに機関誌を発行するかという課題に取り組んだ結果の選択と言えます。作業場と印刷・製本の機器は、公共団体のご提供によるものを利用していただきますながら、作業は、会員の手作業によって進められます。如何にチームワークよく進めていただいているかが知られます。

編集に当たって下さっておりますのは、現在は木下和久さんです。既に一〇年近くお願いしております。

当初の編集者は宗助悦子さん。宗助さんには本誌を創刊するという、重いお仕事が課されました。どんな内容にするか、規模はどの程度にするか、体裁はどのようなにするか、年に何回発行するかなど、試行錯誤を繰り返しながら形を整えて下さいました。

二代目は宇田川幸子さん。宗助さんがご事情で会を離れざるを得なくなつて、急遽お引き受け下さいました。宇田川さんもお仕事の傍らの活動で、ご無理をお願いしてのことでしたが、ぎりぎりのところまで頑張つて下さいました。その後お仕事がお忙しくなつて、会を離れることとなりました。

その後は木下さんがお引き受け下さり、発行も安定することができました。編集に当たって下さいました歴代の皆様、誠にありがとうございました。木下さん、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

この間の一つのエポックは、表紙絵を二〇〇〇年から、岡稲子さんをお願いできたことです。それは現在に至つても続けてお願いしております。そして当初の表紙絵のモデルであつたお嬢様が、現在では家庭を持たれて、お子様に恵まれておられることです。このこともまた、この間の時の長さを物語るもので、感慨も一入です。うれしくそのニュースを伺つたことが思い出されます。

本誌を発刊するに当たつて私どもに課せられた課題の一つが、視覚障害者を読者と位置づけることでした。これをどのように実現するか、漢点字で打ち出して、希望者に配布するということも取り上げられましたが、コストの面や作業上の負担の面を勘案します

と、実現は困難であることが分かって参りました。しかもそのような方法を探りますと、対象を漢点字の習得者に限ることになり、そうでない人を、読者から除外することになることに気づいて、この方法の採用は取りやめることになりました。

そこで音訳版の作成を目指すことにして、社会福祉協議会に、音訳活動を行っておられるボランティアの方をご紹介いただけるようお願いしましたところ、音訳グループのやまびこ様をご紹介いただきました。このようにして本誌も音訳版を製作していただきました。視覚障害者向けに発行できるようにしました。やまびこ様は現在も引き続き、音訳版の製作をお引き受け下さっておられます。感謝に堪えません。

なお現在ではEIBファイルと、ブレイルメモ用の電子データで、本誌の漢点字版をご提供しております。このように本誌を創刊のころから振り返ってみますと、幾つか思い出されることがございます。それは本誌を発行することに対する反応から知られることで、多くは私にとつて当然だと思われることが、視覚障害者、あるいは視覚障害者をめぐる社会では、常識でも何でもなく、むしろ変わった考えと捉えられていることに気づかされたことでした。

その一つが「識字」です。

私は盲学校の出身で、文字の教育を受ける機会を得られぬままに社会へ出ました。そこは言葉が支配する世界で、言葉の使い手が主導権を握る世界でした。どこでも言葉の理解力、言葉での表現力が試されていました。そのような中に放り出されてから暫くして、何とか冷静に反省できるようになってみると、私自身が「非識字者」であつたことに思い至つたのです。文字の教育を受けていないのですから、これは正しい意味で「非識字」の状態だと、認識することができたのです。その後何とか日本語を表現する文字、そういうことを、考え続けることになつたのです。

そんなところにある点字雑誌に、「漢点字の通信教育の受講者」の募集記事を見出して、一も二もなく私は、漢点字の創案者である川上泰一先生にお手紙を差し上げて、漢点字の勉強を始めたのです。

そのようにして漢点字を習得して漢点字習得者とお付き合いが広がつたのですが、そんな中でまたも驚かされることになりました。漢点字の習得者とのやり取りの中で私が、「視覚障害者は非識字者」であることに気づかされたのです。相手は漢点字の習得者で

すから、自らの「非識字」の状態に気づいて、そこから脱却すべく漢点字を学んで来られたものと考えていた私は、見事に肩すかしを食ったのでした。相手の方々は、「非識字」という言葉に、強い拒否を示されたのでした。どうやら私のようなプロセスを踏んで漢点字を学ばれたのではなかったと考えるしかないようにしました。私はさらに重ねて「漢点字を使って語彙を豊かにしましょう」などと申ししたこともあります。がこれには何の反応もありませんでした。

漢点字習得者の間でもそのようですので、そうでない人との話の中にこのような認識を持ち出すことはタブーだと、私は肝に銘じました。ところがある日、漢点字未習得者（習得する意志を持っておられない人）と、漢点字の話をする機会がありました。「文字を知らなければ本は読めないでしょう。」と、つい私は口にしていました。これはタブーに触れるということ、を、うっかり忘れていたものと思います。件の主は驚いた様子で、気色ばまれました。「何で読めないんですか？」と、怪訝な面持ちで尋ねて来られました。私は慌てて口を塞ぐようにしてごまかしたのを覚えています。

このようなことは視覚障害者を相手にする時ばかりに起きるわけではありません。視覚障害者と縁の薄い

人との間では、当然こうあるものはこうあると言う話で済むところが、視覚障害者との縁の濃い人ほど、視覚障害者を相手にしている時に似通った齟齬を来すことになりまます。

私は自らの「非識字」の状態を何とかしたいと念じて漢点字を勉強したのですが、視覚障害者の周辺の晴眼者の皆さんは、ほぼ全員が、私を「漢点字愛好者」と遇しておられます。確かに私は漢点字を「愛好」しておりますが、それは「非識字」の状態を抜け出すための方法として位置づけているのであって、単に「好き」だから漢点字を使っているのではないのです。が、これを理解しては下さいませんでした。どうやら彼らは、「非識字」の状態を抜け出す方法どころか、私の置かれていた状態を「非識字」と理解することを拒んでおられるようでした。（とは申ししても漢点字に出会う前の私は、ある点字図書館の館長から、「先天の視覚障害者は漢字を知らないからこまる」という言葉を聞いております。）あるいは、「非識字」の状態から抜け出す方法は、他にも複数あると言われるのかもしれません。漢点字の習得もその中の一つであって、視覚障害者はその幾つかの方法から好みの方法を選択すればよろしいと、無言のうちに言っておられるようでした。とは申ししても、どんな方法があるかは、

彼らが提示して下さるわけではありません。暖簾に腕押し、このような人々は、視覚障害者の「非識字」の状態そのものに、関心をお持ちでないのかもしれない、私はそのようにも考えてしまいます。

以上は、「非識字」の状態からの脱却を例に、本会の活動、そして本誌の発行を通して私が学んだところを吐露したのですが、これは一つの例に過ぎません。他にも私が当然と考えて来た事態が、視覚障害者、そして視覚障害者の周辺の晴眼者の間では、見事に逆転してしまう例が、無数にあります。本誌の発行は、私にとつて、そのような発見に導いてくれるものでもあったのでした。

漢点字は漢字を表す唯一の触読文字です。言葉の豊かさは「読む」ことを通して、語彙を自らのものにするることによって実現されます。視覚障害者が使用できる文字は、触読文字しかありません。その触読文字の漢字体系である漢点字を存分に使用するには、漢点字で表された書物を、数多く製作して参らなければなりません。これから先、豊かな語彙を使いこなして、社会で活躍する視覚障害者の出現を願って、活動を続けたいと考えます。

皆様のさらなるご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

文字を求めて〜一失明者の辿った歩み

東京漢点字羽化の会

田中 秀臣

田中様は、成人されてから失明されました。一念発起されてカナ点字の触読に挑戦され、さらに漢点字を習得されました。現在は、東京漢点字羽化の会の発起人のお一人として、活動の中心のお一人として重責を担って下さっております。

1957年の春、私は原因不明の難病で突然視力を失った。入院した大病院では小児科と婦人科を除く殆どの診療科で来る日も来る日も検査の連続と試行的治療が続けられた。原因不明となれば、当然治療の結果に副作用の発生は免れない。大学の講堂に副作用の見本として何度も協力を依頼されました。入院5年目には殆ど視力が無くなり、太陽の光も認識できなくなってきた。感じるのは熱気のみである。記録する術を失ったこの時点で、見舞い客の覚えも休職中の勤務先

への「近況報告」も出来なくなってしまう。

そこで、視力を使わずに記録し意思を伝える方法かと思ひ巡らしてみ、音声伝達と触覚文字の点字が閃いた。

当時、入院中の音声伝達となると電話しかない。一方、点字であればベッド上でも学習出来るのではないかと思索し、病院を抜け出し点字図書館を訪ねてみた。生まれて初めて点字に触れた時の衝撃を今も忘れられない。指で触れても全く文字として認識出来ない。それでもさらさらと読む子供がいる。私の触覚は異常なのか、私にとつて点字に実用性があるのか、悩み続けた。一方、点字の構成はローマ字を理解できれば極めて単純な音標文字であることが判った。退院後、群馬県の高崎から大病院への通院を機に、点字教室に通うことにした。この教室では、受講者のニーズに合わせて書き取りと触読の指導が繰り返された。毎回、大量の宿題があり、寝ても覚めても点字と格闘するような生活が続いた。3ヶ月ほど点字に触れていたある日、突然指先で文章らしき一節を感じる事が出来た。この日を境に次々に読み取る文字が増えて、優しい文章であれば読めるようになってきた。そこ

で、図書館から大量の点訳書を借り受け読み続けた。お蔭様でやつと点字を自由に読み書きできるようになったのである。

ここで、はたと思索してみた。点字は晴眼者には通じない。円滑にコミュニケーションするには普通の文字でなければならぬ。そこで英文タイプライターでローマ字入力してみた。何とか意思を伝えることは出来たが、読み手に相当の負担をかけてしまう。負担を軽減する一法としてカナタイプも使ってみたものの、長文になると前者と同様に読み手の負担は避けられない。タイピングの決定的欠点は、全盲者自身で見直しが出来ないことである。

さて、3年間のリハビリを終了し職種を変えて医療スタッフとして社会復帰した1974年のとある日のことである。友人のI君から大阪府盲の川上先生の考案した「漢点字」の通信教育があるので勉強してみないか、との誘いを受けた。日本の点字は片仮名・平仮名・漢字の区別が無い音標文字であり、一般に通用している漢字仮名交じり文とは違う。これは私一人が感じていたわけではなく、既にH先生の開発した「6点漢字」や川上先生の「漢点字」のように点字にも漢字

が必要として受けとめられていたのである。6点漢字は音と訓を組み合わせた点字記号であるが、限られた基本文字を簡単に表現できるものの、複雑な漢字体系をカバーするには難点がある。一方、漢点字は漢字構成の基本である部首に注目した構成であり、漢字の文字としての発展性に期待できた。

以上のような前段があつて、音声ワープロの出現を待ったのである。一般に文章を綴るには、当然のことながら加筆や訂正が必要であり、従来の点字ではこの点が困難であつた。1990年頃に我が家にも音声ワープロが導入され、かなり自由に読み書きが出来るように文字環境が回復しつつあつた。ここでの問題は日本語の読みの難しさにネックがあることであつた。

前述の漢点字の学習は半年ほどで終了し、地域活動や学習仲間との研修活動で日常生活での実用性を確かめ合つた。ある時には、日本の将来を担うA新聞社の新入社員のオリエンテーションに参加し、普通に印刷された文書と全く同文の漢点字訳の点字印刷物を一字一字指先で触読してみせた。この時点で視覚障害者の達し得る文字環境を披露して見せることで、障害者を

巡る読み書きのバリアフリーの一端を披露することが出来た。一人でも多くの視覚障害者に晴眼者と同じ漢字仮名交じり文を共有する環境を実現したいと願つていた折も折り、再びI君から漢方の聖書ともいう「難経(なんぎょう)」「の漢点字訳を横浜漢点字羽化の会の岡田さんにお願したいとの意向が伝えられた。田中さんも一緒に付き合つて欲しいとの事で、墨田区のみどり図書館に出向いたのが羽化の会との出会いであつた。機関誌「うか」とのお付き合ひも今日まで延々と続き、「継続は力なり」の言葉のように羽化の会も着々実績を積み重ね100号に達そうとしている。古文・漢文にも挑戦し、成果をあげている。その間ひきふね図書館の山内薫さんを始め、実に多くのボランティアの献身的なご支援とご理解を頂き、ただただ感謝である。

ここで問題は、漢点字を読める仲間を如何にしたら増やせるかである。日本人である以上、漢字と無関係な人はいないはずで、視覚障害者も教育界も大きく一歩踏み出す時期に来ているのではないか。

(2014年7月)

点訳へのかかり

東京漢点字羽化の会、江東区在住

齋藤寿美子（さいとう・すみこ）



齋藤様は、横浜・東京を通じて、最も古くから漢点字の活動に関わって下さっております。お住まいが東京ということもあって、横浜の活動には直接のご参加はありませんが、設立時には、多大なご支援を賜りました。2005年の東京漢点字羽化の会の立ち上げには、文字通り活動の柱として、ご参加くださいました。現在も変わらずご尽力下さっております。

1986（昭和61）年に音楽教室の点字教室で武蔵野音大のヴァイオリンを弾かれる田辺藤祐さん（視力障碍者）からカナ点字の点訳を週1回3か月習いました。そこで点訳活動をしているグループを教えてください、住んでいる江東区ではないのですが、通い易い墨田区の「点訳ひかり会」に1987年4月入りまし

た。5月から緑図書館で木村さんの漢点字墨字対照表の校正を手伝い、少しずつ漢点字点訳にかかわってきました。

1991（平成3）年から横浜国大の学生是澤富夫さんの漢点字打ち出し（参考書、授業の資料、NHK中国語講座テキスト、同漢文テキスト等）。（点訳ソフト ハッテンカを使って）

1991年から「朝日歌壇・俳壇」の漢点字訳、打ち出し、読者への発送を開始。このあたりから岡田さんと連絡を取りはじめたように思います。

1996（平成8）年の1月から2月にかけての横浜の漢点字講習会のお手伝いをしました。6月頃から「ひかり会漢点字部」を作り、主に緑図書館で漢点字点訳を専門に始めました。

2005（平成17）年の東京での漢点字講習会（10月5日、19日、11月2日、16日）に参加。東京漢点字羽化の会発足（12月7日）。

このように書き出して見ると、点字を教えていただいた頃中学2年だった息子が今は40歳を過ぎ、小学3年の孫がいるのです。28年になります。

初めは点字板を使い手で一文字ずつ打ち出し、次はタイプを使って、そしてパソコンにと変わってきました。パソコンを使いだしたのは点訳するのに必要だったからで、点訳に必要な使い方だけを教わって、せっかく入力したものを間違って消してしまつて再入力をしたりしていました。点字印刷もスムーズにゆかなく、今の外字にあたるところはカナ点字を入れてあとから点字を手で足して漢点字に直したり、途中で止まつてしまつた印刷の場所を探して続きを印刷し直したりと大変でした。それから考えると、横浜の吉田さん、木下さん、岡田さんが作つてくださった点訳ソフト「E i b r k w」は素晴らしいです。

点訳をするようになってからパソコンがどうか使えるようになりましたし、自分では絶対に読まないような部類の本に携わりましたし、漢字についてもいろいろ勉強させていただいています。またいろいろな方とお付き合ひするようになりました。良いことだらけです。

これからも皆さんと漢点字点訳を続けてゆきたいと思えます。よろしくお願ひします。

羽化の会に参加して

田中 かほる



機関誌「うか」百号！発刊 おめでとうございませす。

100冊も発行したという事実はすごいですよ。やや、こぶりの冊子とはいえ、そこには美しい表紙絵から始まり、多くの方々の文章が載っている…、それらはほぼ会員の方の文章で、内容は重く大切なものばかり。こうして百号も続いたのはそれらをまとめられた岡田会長と木下編集長の努力の賜物です。心して読まねばいけませんね。

そもそも、私が羽化の会にお世話になり始めたのもう十数年前でその頃はまだ現職でした。私は、運良く視力に恵まれていて、親や弟妹とはちがい近眼にならず70代の今でも裸眼で新聞が読めるという人間なので、中学の頃からずっと、もし仕事をしなくなったら点字を習つて良い目の恩返しをしようと思つていました。

さて、ついにその時が来たのですが、当然60歳になつていた私は既に記憶力と意欲が減つていて点字が新

しく頭に入るのか、怪しくなってきました。ただ、運の良いことにその頃パソコンやワープロが当たり前になって来ていて、点字を覚えなくてもできる仕事があるということを知りました。で、そういうことが出来るのか地区の区役所へ聞きに行きましたところ、羽化の会の存在を教えてもらえ、会にご連絡をしたのが発端でした。

最初は準会員として機関誌、まさしくこの「うか」や資料を送って頂き活動の内容を知ったのですが、退職後、会員となると同時に、早速岡田さんから仕事が届きました。が、入力用の講習などを全く受けずに、マニュアルを見て岡田さんの指導を受けながら一人で始めたのですから、今から思うと無謀？かつ大胆なことでした。

最初は毎週、新聞の医療記事の入力でしたが、そのうちに仕事はどんどん増え、いつの間にか多い時には違うジャンルのものを4本も引き受けていました。何しろ、羽化の会の入力は高度な文章と文字が多く、私などこれから先、手に取ることもないだろうと思うようなものが多数。これを誰が読むのだろうと思いつつ、入力をさせて頂いたものでした。

こうして何年も入力をしているうちに私はすっかり集中力が落ちました。校正後の自分の仕事を見ると、その入力ミスの多いこと！ 我ながら自己嫌悪に陥るばかりでした。

そこで、申し訳ないことながら、現在では入力の仕事や辞退、出来るだけこの機関誌作りの作業と漢点字講習会に参加するという方針に勝手に変更しています。

そうそう、私が羽化の会で、少しはお役に立ったかなと思うのは、岡田さんからの要請で「漢文の紹介」をしたことかもしれません。何も私が講義をしたわけではなく、初歩の漢文の本を1冊まるごとご紹介したわけなのですが、漢文には返り点などのいろいろな約束事があり、それらは全部縦書きの行の中に表されていますよね。ですから漢文の本を漢点字で横書きで表す事など簡単にはできません。で、表記のことで問題にぶつかるたびに岡田さんと連絡しあい、最終的に全部岡田さんが表記の発明？工夫をなさり、それによって羽化の会の漢文が始まったのです。

私は、たまたま現職の時に、仲間と小学校で習う全漢字を教科書とは違うテキストとして作りまして、そ

の時にずいぶん漢字の勉強をしました。白川先生のお話を聞いたり出版社の方と話したりもし、おかげで六書を初めとして漢字の成り立ちや歴史も知り、漢字への興味と関心が深まりました。それが今、この羽化の会の漢点字講習会に参加していても役立っている：過去の経験や体験が思いもかけないところで、役立つといいますがその通りだと実感させられています。

ところで、羽化の会の会員の方々は、みんな気性がさっぱりとしていて親切で明るく仕事を積極的になさる方ばかりです。ボランティアですから利害関係がないとはいえ、グループによっては色々と気を遣うところもあるそうで、そういうところのない羽化の会はずばらしい会です。ですから、今後羽化の会は発展し、もっと点字の蔵書が増えることでしょう。でも人はイヤでも年を取ります。会員も高齢化していくのは止むを得ないこと、ですからこの気持ちのよい羽化の会に、より若い人が、多数集まって来て下さるようになっていきます。

駄文を連ねましたが、岡田さんと木下さんという二本柱のお二方をはじめ、会員の皆さんの今後のご健康を心から願いつつ、閉じさせて頂きます。

『常用字解』音訳プロジェクト I

字解音訳プロジェクト

NPO法人 音訳・朗読の会 ブライユ

国立市在住

平井 任子（ひらい・たかこ）

平井様は、音訳活動を行っておられますNPO法人「ブライユ」を主催しておられます。『常用字解』のDAISY版を作ろうという呼びかけにお応え下さって、2011年から一緒に活動して下さっておられます。法人格を持った大きな組織を束ねておられますこともあって、最も多くの文字をご担当下さっておられます。岡田との連絡も、全て平井様の手を通して行っておりますので、ご苦勞も計り知れませんが、お付き合いの進行に連れて、その信頼の厚さを感じております。

『うか』100号記念、おめでとうございます。

全国音訳ボランティアネットワークの総会に挿入さ

れていたチラシに「『字解』を読もう」の募集を見つけて、ピンとひらめくものがあり、ドキドキしたのを覚えています。いいものみつけた、嬉しいような、よし！というような感情が湧いてきました。年間100タイトルのDAISY図書を作成していて忙しいかもしれないけれど、「ブライユ」の取り組みとして全員で取り組めるという確信も感じました。

まずは、『字解』を購入してみました。すぐ目に飛び込んできたのが、甲骨、金文、篆文などの文字の形。これを音訳しなければならぬのか……。少し引けてしまいました。なんとかなるさ、とさっそく30数名の会員にメールで流したところ、全員が「やりがいのあることだと思う」という答えが帰ってきました。

2011年6月29日、初めての打ち合わせにもっとたくさんの方たちが集まると思っていただけですが、意外に少ないので心配になりました。でも、そこはコツコツが取り柄の音訳者。出来不出来はさておき、ときには岡田様と丁々発止のやりとり（そういうとき、高め合っていくことの素晴らしさ、一種の感激すら覚えます）や、メール交換で意見を言い合いながら、なん

とか現在まで続けて来られました。

漢字の難解さに、ときには『常用字解』をほっぽり出した衝動に駆られることもありました。あまりにも理解が出来ない自分のもどかしさを思つてのことですが、岡田様や羽化の会の方々は、もっともつと歯がゆさを感じていらつしやるだろう、と気を取り直して…の繰り返しでした。一種、自分との闘いでした。20年ぐらい前から「漢点字」があることは知っていました。が、その本元に飛び込むことになろうとは…。

岡田様の「漢点字の散歩」を読んで衝撃を受けました。音訳をしたものを聴読して、かな点字を触読して、それを読書といえるのか。そこには「漢字」は存在しない、とおっしゃることに、はじめは何のことだか分かりませんでした。そのうち私の心の中に巨大な岩がずつしりと重くのしかかってきました。衝撃的でした。そしてブライユ全員に読んで貰いました。それまでは一進一退の文章化に、ときにブーイングが起きることもあったのですが、ピタッとそれは止まりました。取り組む姿勢が変わってきたように思えます。

再々度の見直しは必要ですが、やっと少しずつ録音

に入っていくる時期に來たのでしうか。読みの速度も声質も違ふ多人数での録音はどうなるかと、ブライユの会員に添削済みの2文字の試聴用DAISYを作製して校正をしています。如何に聴きやすい音訳にするかということがこれから先の課題です。まだまだ文章化で変更がある一方、同時進行が求められて行くと思ひます。やつとここまですり着いたと思ひと同時に、情熱だけでは解決できない“時間”との闘いがまだまだ続きます。

ブライユは3つの支部があります。それぞれ勉強会の日がちがひ、全員が顔を合わせるのは総会や研究会(年に1、2回)くらいですが、常用字解の音訳のおかげで行き来が活発になり、ブライユが一体になった、という感が強くなりました。視覚障害者のために、というよりブライユのためにこのプロジェクトに参加できて心から良かったと思ひています。プロジェクトの皆様、完成版を見届けるまで元気でいませう。

『常用字解』音訳プロジェクトⅡ

字解音訳「岡田メモ」から始まる

字解音訳プロジェクト

墨田区在住

藤田 教子(ふじた・きょうこ)

藤田様は、東京都墨田区内で、音訳ボランティアとして、図書館を中心に活動しておられます。『常用字解』のDAISY版を作ろうという呼びかけにお応え下さって、2011年から共に活動して下さい下さっておられます。明敏な読解力からのご指摘には、しばしば目を見張る思いがします。

『常用字解』の音訳は2011年6月にスタートしました。最初、岡田様から、漢点字と字式と字形、漢点字符号、漢字の読み方の統一などのお話がありました。今まで経験してきた一方通行の音訳と違ひ、漢点字の字式と「岡田メモ」という二つの手段が提示され、これからの活動がかなり立体的な取り組みになる

ことにとっても新鮮さを感じました。

漢字の読み方の統一は「岡田メモ」を基準にすることが決まりました。「岡田メモ」とは言うまでもなく岡田様が作られた膨大なメモのことです。見出し字は「岡田メモ」で始まり、その項は「岡田メモ」で終わります。本文の解説の中の漢字の説明も「岡田メモ」が使われています。そのようにして、一つの漢字が音訳者ひとりひとりによってまちまちの説明にならないようにするためのものでもあり、「岡田メモ」は重要なツールとなっています。

さらに、見出し字の字形の説明が、本文の解説の前に独立した形で置かれ、漢点字の字式を「岡田メモ」を使って文章化していますが、文字によっては、本文の解説とリンクしてとてもユニークな形になっています。

さて、実際の作業で岡田様に質問することが多く出て参りますが、中でも、字式のない象形文字の字形を端的に説明することは容易ではありません。また、同じ音の漢字がたくさん出てきてしかも意味が違う場合など原本のリズムを壊さないように対応するのはたいへんです。例えば私が担当致しました「放」は、ほぼ次のようになりました。未だ未完とさせていただきま

す。

「放」

581

1 ホウ・ はなつ・ほうそうのほう

2 漢点字符号 ホケンノホ ヨンゴウロクノテン

3 8画

4 音読 ホウ、旧カナ“ハウ” 訓読 はなす

はなつ はなれる 細字(ほしいまま)

5 字形 「かた・せいほうけいのほう」の右側にのぶん・うちすえるかたちのぼく

6 金文1 篆文1

7 解説 会意。方(ホウ) (せいほうけいのほう)と支(、ぼく) (とまた・うちすえるかたちのぼく)

文(のぶんのぼく)とを組み合わせた形。方(せいほうけいのほう)は横にわたした木に死者をつるした形で、邪悪な霊を祓(はら)うためのまじないとして境界のところにおいた。支(とまたのぼく)はうつの意味であるから、方(ホウ)を殴(、う)つ形が(見出し字)放で、邪霊を追放する 追いはらう 儀礼をいう。それで「はなつ、しりぞける、つきはな

す、はなす」の意味となる。また放縦（、ほうじゅう）（放は見出し字、縦は たて・じゅうおうのじゅう） 気ままなこと。ほしいまま。ほうしようともよむ、放漫（ほうまん）（放は見出し字、漫は そぞろ・まんざいのまん）・放慢（ほうまん）（放は見出し字、慢は おこたる・たいまんのまん） 自分勝手なこと のように、「ほしいまま」の意味にも用いる。白（ハク）（しろい・こくびやくのはく）はされこうべ 風雨にさらされて白っぽくなった頭蓋骨（、ずがいこつ）の形であるから、されこうべが残っている死者を木につるして殴つ形が敷（、きよう）（「見出し字 放の偏の 正方形の方の上に こくびやくのはくを乗せた形」）で、その死者の強い霊の力を殴って刺激することを敷（、きよう）「見出し字放の偏に黒白の白を乗せた形」もとめる といひ、邪霊を追放することを求める儀礼である。その儀礼を辺徼（、へんきよう）（辺は あたり・しゅうへんのへん、きようは「もとめる・へんきようのきよう・行人偏のみぎがわに「見出し字放の偏の上に黒白の白を乗せた形のキョウ」で行うので徼（、きよう）（辺きようのきよもとめる といひ、その儀礼を道路において行うことを徼（、よう）（「むかえる」・「ヨウゲキのヨウ」・しんにようの右にのぼしたあしの上に「見出し字の偏の上に黒白の白を乗せた形のキョウ」）むかえる、もとめる といひ、その儀礼のとき高く声をあげて責めることを敷（、きよう）（くち・こうくうのこうの右側に「見出し字放の偏の上に黒白の白を乗せた形のキョウ」） さげぶ という。敷（「見出し字放の偏の上に黒白の白を乗せた形のキョウ」）にさらにされこうべの形の白（こくびやくのはく）を加えた敷（、きよう）（こくびやくのはく の右側にきよう） しろい は、されこうべの色の白さをいう。文章の力で刺激を与えようとするものを 檄（、げき）（「ふれぶみ」・「げきぶんのげき」・木への右側に「見出し字放の偏の上に黒白の白を乗せた形のキョウ」） ふれぶみ という。

8 用例 「放逸（ほういつ）（逸は すぐれる・それる・いつぎいのいつ）」……：勝手きままにふるまうこと

「放言（ほうげん）（言は いう・はつげんのげん）」……： 無責任な発言をすること。また、その発言

「放逐（ほうちく）（逐は おう・ちくごやくのちく）」……： 追い出すこと

「放流（ほうりゅう）（流 は ながれる・すいり
ゆうのりゅう）」……：せきとめていた水などを、
はなち流すこと。また、稚魚を川などに放すこと

「開放（かいほう）（開 は ひらく・かいへの
かい）」……：戸などを開けはなすこと。また、
制限を解いて、出入りを自由にする事

9 はなつ・ほうそうのほう 終わり

なんとも恐ろしい光景が浮かんできますが、漢字と
は、このような「儀礼」と結びついていたことを忘れ
てはならないという畏敬の念さえ覚えます。私は
「放」の字に大変驚かされました。こんなに分解され
て発展する展開があることは全く驚きです。この解説
の中に「白」が初めて出てきたとき私は「しろ」と読
みました。すると、ブライユの平井様から、「それは
『ハク』ではないでしょうか。」というご指摘を頂き
ました。そうなのです。そこは「ハク」でなければな
らないのです。思い込みは要注意です。

このようにして『常用字解』の音訳は進行していま
すが、『うか』でもたびたび紹介されています。それ
で此の度、実際にその音訳に携わっている立場から、
今、どのように進行しているかということのご報告を

させて頂くべきではないかと思ひ、寄稿させていただきますことに致しました。

私はこの会合の初回で初めて岡田様と木村多恵子様
にお会い致しました。特に同じ墨田区にお住まいにな
られて『うか』でいつも心に残る美しいエッセイを書
いていらつしやる木村様にお近づきになりましたこと
は大変嬉しいです。また、MLに添付ファイルが届か
なくて木下様大変お世話になりました。有難うござ
いました。この会合に参加して『常用字解』と深く接
することになり、改めて漢字の世界に身を置いている
ことをありがたく思います。すでに三年が経過し、ま
た完成するまでのくらの月日が必要とされるでし
ようか。

音訳とはどういうものか。どうあるべきか。真の能
動的読書は音訳書で可能なのだろうか。そのようなこ
とを考えながらひとつのものを作って行く月日はかけ
がえのないものと思われまふ。そのためのエネルギー
を失いたくはありません。

最後になりましたが、『うか』第10号おめでとご
ざいます。

平成26年9月4日

音訳グループ「やまびこ」より

澤村様、駒木様、山本様、本間様、金子様の五名の方々は、現在本誌・機関誌『うか』を音訳に当たって下さいます音訳者の皆様です。横浜市社会福祉協議会を拠点に活動しておられる音訳グループ「やまびこ」に所属しております。大変お世話になっております。

機関誌「うか」100号に寄せて

「うか」100号おめでとう御座います。

音声訳ボランティアをしております「横浜音声訳グループやまびこ」です。「やまびこ」では63号（2007年）からお手伝いする事になり、現在に至っております。現在は5人のメンバーで音声訳とDAISY編集に携わっております。

点字の読みもままならない私達が「漢点字の散歩」や「漢文のページ」で「漢点字」がある事を知り、そして「漢文」の読みは遙か昔を思い出し勉強になっております。漢点字表記で書き込んで行くという作業が

ありますが、間違いないよう神経を使いますが勉強になります。

お引き受けした当時はカセットテープで90分でした。90分以上の原稿が毎回有り、岡田様に依頼し大切な原稿を一部削除していただいたりお手数をおかけしました。デジタル移行までの間テープ読者とCD読者双方の製作をしておりました。読者の全員がCDに移行してから削除していただく事もなく、原本通り製作できるようになり、現在は20分位のCDを製作しております。

会の運営並びに機関誌「うか」発行に当たり岡田様始め会の皆様方のご努力はいかばかりと思えます。岡田様がご病気で数回発行出来ない時期があり心配致しましたが、お元氣になられ安堵致しました。以前は隔月発行でしたが季刊の年4回となりました。

最後に貴会益々発展し200号に向け末永く続けられますよう祈念します。私達もCD作成をお手伝いしたいと思っております。

宜しくお願い致します。

澤村英子

「うか」100号記念に寄せて

「うか」を音声訳するのは、一言で言えばとても勉強になります。漢字の読みの調べに付随して、思い込

みの間違いがないか、状況に応じての正しい読み方や、意味も調べていくこととなります。漢文、古典、歴史等など一通りの学校の勉強や、好きな事とっている範囲でも知らなかったことに目を開く思いです。「羽化の会」の深い活動の素晴らしさが詰まった機関誌ですが、一人でも多くの人に広がっていくことを願って音声訳しています。

駒木みどり

「うか」創刊10号おめでとうございます。

私は63号から音声訳に携わっています。漢点字ってなに？ 音声訳を始めて2、3年目の私で大丈夫なの？ と不安の中で始めたのを覚えていきます。

こんなに漢和辞典を引いたのは何十年ぶりだし、漢文も懐かしいし、担当する度に大変だけど楽しく作業をしています。

これからもよろしくお願いいたします。

山本直子

機関紙「うか」発行10号、誠におめでとうございます。

心よりお祝い申し上げます。

私が御誌の音声訳・編集に携わるようになってか

ら、まだ1年半ほどでしょうか。回数にしたら多分3〜4回だと思えます。30ページ前後の可愛い冊子ですが、中身の濃い、また、木のぬくもりのするような暖かい内容で、いつも心が和みます。と同時に、万葉集や漢文等は学生の頃に戻り復習しているようで、毎号楽しみにしています。

どうか今後も200号、300号と末永く続けられるよう、心より願っております。

岡田様をはじめ皆様、くれぐれも、ご自愛ください。
本間房江

「うか」100号、誠におめでとうございます。

「うか」機関誌の音声訳を、私はまだ、数回させていたただけですが、毎号の紙面を拝見するたびに驚くことばかりです。

先ずは、岡田様はじめ皆様の、漢字を点訳なさろうとする、情熱に。次には、漢字でなくては表現できないと思われる、知識の深さに。そして、木村様の「わたくしごと」の文章のやさしさに、いつも心の洗われる思いです。

これからも、200号300号と末長く、発刊されますようにお祈りしております。

金子里美

点字から識字までの距離(九四)

野馬追文庫(南相馬への支援)(十二)

墨田区立ひきふね図書館 山内 薫

南相馬へ(四)

南相馬でお預かりした乾千恵さんのリトグラフ「馬」を軸装する件で元墨田区の音訳者で表装を勉強しているというHさんに連絡を取って、「馬」を見て頂いたが、リトグラフで刷られた紙はかなりの厚さがあるために軸装するには紙を薄くしなくてはならず、Hさんにはその技術はないとのこと、表装の先生を紹介して下さることになった。このリトグラフについては、乾さんご自身も次のように述べられていた。

「馬」の書のことですが、あの書は横長ですし、紙も厚め、それに洋紙なので軸装は難しいのでしょね。色々な所へあの書たちは行っています。図書館などでは、額(手作りの軽い額状のもの)などに入れて置いてもらっています。床の間にもこの状態で、掛けて下さっている方もいらして、それはそれでじっくり落ち着いています。また、みなさんで(楽しんで)考えて頂けると嬉しいです。」(二〇一三年一月

のメール)

Hさんが紹介して下さった日本表装美術協会の会長をなさっている野崎さんという方が、たまたま墨田区役所に来られる用事があり、そのついでにあずま図書館に寄って下さることになった。一月二十九日に早速リトグラフを見て頂き軸装が可能であるというお返事を頂いた。四月に南相馬市立中央図書館で開かれる乾千恵の書展に間に合うように三月中には仕上げて頂きたいこと、南相馬の図書館が緑を基調とした色で統一されているので、緑色の生地を使って欲しいことをお願いした。実際に南相馬市立中央図書館で撮ってきた写真、特に椅子に使われている「薄いグリーン」と「深い青みがかかったグリーン」を見て頂き、色見本として携帯で写真を撮って帰られた。

三月のはじめに野崎さんから連絡があり、やはり墨田区近辺に用事があるの



下さるということになった。軸装に使われた絹の生地は左側が緑がかつた青で、ぼかしによって右側のグレーと繋がっており右側五分の三程が絹の光沢を抑えたグレーになっている。リトグラフの縦の長さのほぼ二、五倍くらいの長さの布のやや下部に表装されたリトグラフが位置している。なおこの掛け軸は桐の箱に納めて頂いた。

この間、あずま図書館からひきふね図書館への引越し作業がようやく終わり、ひきふね図書館の開館セレモニーが行われた三月三日の日曜日に浦和のDさんのおつれあい軸装された「馬」を取りに来られた。

いよいよ四月九日から一四日までの南相馬市立中央図書館での「乾千恵 書展 『月人石』の世界」が開催される。書展の案内には「展示 千恵さんの一三枚の書、川島敏生さんの一四枚の写真、谷川俊太郎さんの一三のことば」とあり「絵本『月人石』（福音館書店）は、書道家、写真家、詩人の競作です。乾千恵さんの『書』は『扉』『猫』『風』『音』『馬』『影』『水』『石』『火』『山』『蟻』『月』『人』の二三文字。漢字の意味を書体で表現するだけでなく、動と静、大と小。自由で迫力のある書に感動します。この書に写真家川島敏生さんの『写真』が加わり、その力

強い字が画面一杯に躍動する写真があります。そして、それぞれの『書』に詩人の谷川俊太郎の『ことば』が添えられています。」と記されている。

四月九日（火）から一四日（日）までの日程はTさんから次のように報告があつた。

八日 浦和のKさんたちが、書と一緒に車で、南相馬入りして下さいます。

九日 朝一番に搬入、クラフトルームで展示ー図書館友の会の方が手伝って下さいます。

午後 仮設住宅集会所の平日定期サロンへ書を持ってKさんたちがお話し会

一〇日午前 仮設住宅集会所の平日定期サロンへ書を持ってKさんたちがお話し会

午後 Kさんたち浦和のグループは埼玉へ帰途

一日午前 大阪グループ到着
午後 友の会との交流会

二日午前 仮設住宅集会所の平日定期サロンへ書を持ってお話し会

午後 仮設住宅集会所の平日定期サロンへ書を持ってお話し会

一三日午前 仮設集会所を会場として予約してのお話会の開催ー友の会のメンバーとご一緒に。

一四日午後 四時に撤収

友の会というのは南相馬市立図書館の図書館友の会で正式な名称は「としよかんのTOMOみなみsouま」という。

期間中の具体的な内容についてTさんからメールで次のような報告を頂いた。

「南相馬のご報告遅くなり、申し訳ありません。本日午後五時前には、埼玉から南相馬へ書一式、『馬』の掛け軸、と『呼』を持って、埼玉からKさん他三人、川崎からSさん、八尾からHさんが到着しました。

明日は、開館三〇分前に開けていただき搬入、ともの方のお力も借りて、午前中に展示の予定です。午後は、Kさん、Sさんが、お話し会を図書館でしてください。ともの方や、絵本と童話の会の方が、お話し会を体験したいとのことです。このごろは、図書館のおはなし会には数名しか子どもたちの姿がないようです。

一〇日午前と午後には、『馬』の掛け軸と、『呼』を持って、仮設の定期サロンに行くことになっていきます。午前中は、たまたま、山内さんと昨年ご一緒したイオンの近くのあの仮設です。午後は、原町の借り上げ住宅の方々の集まりだそうです。

一〇日夕方に、埼玉グループは帰路へ。

一日に、大阪からYさん、お話し語り手富田林のHさん、羽曳野のTさん、豊中の子ども文庫のWさん、八尾の図書館友の会のKさん、吹田図書館友の会のHさん、私が午前中に到着予定です。午後は、図書館見学ともの方々との交流会。

一二日、午前、午後は、仮設集会所へ二班に分かれての定期サロン訪問、

一三日は、子どもが一番の多い仮設を、図書館ともの方々がさがしてください、原町絵本と童話の会のSさんとご一緒にお話し会を開催します。

仮設の自治会長Tさんが、Sさんの教え子であったりして、社協を通さずに直接いろいろお話しすることになりました。

その周辺の仮設四〇〇軒にチラシを配って下さることになりました。

子どもたちがほっこりとした時間を過ごせるようにしましょうとのSさんのご意見で様子を見ながら、プログラムを決めていくことになりました。

また、大阪弁の絵本とかを紹介してもらおうと楽しいのではないかと行って貰い、お話し、手作りを用意しています。

千恵さんのお知り合いが北上市から一三人でお見え

になり、南京玉すだれなどもしてくださることになっています。

若い自治会長のＴさんは、何か飴をもらえるみたいなものがほしいですね、と言われました。大阪名物屋さんさん考え、たこやきせんべいも試しましたが、むかしからの岩おこしを持っていくことになりました。余談ですが、買い物に行ってくれるＯさんが、子どもの頃、お葬式の道端で岩おこしを供養のためにと言って、配る習わしがあったそうです。

一四日午後に撤収します。

ともの会の通信をご覧になったこの図書館を設計した寺田さんは、以前どこかの図書館で千恵さんの書をご覧になったことがあり、書の力強さに、被災地の方々が力をもらえる、南相馬にびつたり企画だとのお声を寄せて下さいました。」

会期中たまたま福島県立図書館のＳさんが協力車で南相馬市立中央図書館を訪れ、次のようなメールを下さった。

「九日（火）は、新地町図書館、相馬市図書館、南相馬市立中央図書館、一〇日（水）は、伊達市立図書館、福島市立図書館、二本松市立二本松図書館、本宮市立しらす夢図書館へ、県立図書館の協力車を運転して巡回していました。南相馬市立中央図書館では、

ちようど「乾千恵の書展『月人石』」開催の初日だったので、昼食時間を利用して、ゆっくり見ることができました。乾千恵さんの書に添えられた川島敏生さんの写真、谷川俊太郎さんのことばが、書のイメージを広げてくれました。

とてもすてきな展示会でした。」

会期中会場に置かれたノートには様々な感想が寄せられていたので以下にいくつかを紹介したい。

「力いっぱい書かれた？描かれた文字のタッチを見て、毎日楽しく暮らす力をもらえた気がしました。きつと生き生きと楽しく描いていらっしやるんですよね良い機会をいただきました。期間中また見に来たいです。」

「書は人を見事にあらわしてますね！とてもステキで力強いです！ありがとうございます。」

「しばらくぶりでワクワクしました。文字から元気をいただくなんて思いがけなかったです。ありがとうございます。」

「『扉』うれしかった。左側のノとなったところから外の世界が開かれる予感が……。久々に心がおどりました。ありがとう！」

「すばらしい書を拝見し、今、自分の中で気持ちが悪くないのが、背中を押されたような気がし、ホ

ツと一息つけたように思いました。『生』という書のハガキをいただきました。今、私の兄や義姉が自分の生命と闘っています。この書は心の中にずっしり入り込みました。千恵さんの書に出会えたことに感謝です。ありがとうございます。

「今日は北上から一七人のメンバーで来ました。書の世界に見入ってしまいました。命を入れて心で書いている様子が見る人を引き込んでしまいました。蟻の虫音、羽の動きまでも伝わって参りました。本当に感動です。」

「私も大阪に今年の三月まで住んでいました。自分がいま何を感じているのか、何を考えようとしているのかを、表現することの大切さを、日々感じています。南相馬に帰ってきてきてそれを痛切に思います。誰かの作品や表現されたものを目の前にして、自分自身の中で感じた事を語り合う、胸の中にとどめておく。いつか、ふと思いつくこともあるかと思う。作品の前に立つと音楽の中に入っていかのような気持ちになります。不思議です。また作品を見に来ます。」

「すてきな書展をどうもありがとうございました。福島は原発の放射能の問題で、子供を持つ身には悩ましい事が多いのですが、久しぶりに心が元気になった気がします。」

「東京漢点字羽化の会」第104～106回

例会報告とわたくしごと

木村 多恵子



2014年7月の例会(第104回) 7月9日(水)

13…30、15…30、場所 港区ヒューマンプラザ

7階第2会議室

何時ものように「備える歴史学」のグループの組み分けを決めた。

今月は点字印刷をお願いいたします。何時ものIさんと、Nさんがお引き受けくださった。Iさん、Nさん、どうぞよろしくお願いいたします。

今日は横浜から、Yさんが、『萬葉集釋注』の校正の説明にいらしてくださいました。東京の皆様どうぞよろしくお願いいたします。

10月の活動予定日を打ち合わせた。

『古語辞典』の入力用原稿を、それぞれお持ち帰りにくださった。

岡田さんが漢字の成り立ちについて丁寧に説明して

くださった。

会員の皆様、特に新しい方が、先輩にパソコンのソフトの扱い方について、個人的に教えていただいているのを聞きしながら、その熱心さとご努力に感謝せずにいられない。

会員募集については、横浜の皆様のお話をよくお聞きして、東京でも参考にさせていただいて夏以降に活動することにした。

8月の例会(第105回)、8月13日(水)

13・30～15・30、ヒューマンプラザ7階第2会議室
漢点字に興味を持ってくださった方が、今日は(見学)と言って、例会に来られたが、岡田さんが用意してくださったものを3グループに分けて入力することにし、新しい方も早速実践ということで、第一グループの入力担当を引き受けてくださった。後のお二人がきちんと校正をしてくださるので、脱文と、数字とアルファベットを間違えないようにお願いした。どうぞ根気よく皆様と一緒に長く続けてくださいますように。

なお、ファイル名は、ページ番号が若い順に「通訳

1. txt」から「通訳3.txt」までと決めた。

「備える歴史学」のグループ編成を組んでいただいた。

9月の点字印刷は、何時もの方が行かれないので、9月15日に横浜で例会があり、もし印刷のやり方が分らないときは、横浜の方にお聞きできるので、東京からSさんと、Nさんのお二人の方が行ってくださいることになった。よろしくお願いいたします。

『古語辞典』は「く」の項まで岡田さんのところへ届いているという。

会計の方が、「羽化」の発送費を計上するよう提案してくださいました。

皆様、どうぞ羽化のためにご負担下さっている方は会計の方にお申し出ください。

新しい会員を募るためにどうしたらよいか、横浜で作ったちらしも参考にさせていただいて、以前に東京で作った試作品も参考に検討することにした。

「機関誌うか」は次号は100号(2014年10月発行予定)記念になるので、岡田さんが皆様に、原稿を書いてくださいとお願いした。

2014年11月の例会と学習会の日程をおおよそ決めた。

* 予告

9月の例会(第106回) 9月10日(水) 13:30~15:30
ヒューマンプラザ7階第2会議室

プラザのボランティア室の鍵が一定の場所がないので、あちこち、使用グループを探さねばならない不便さを解消しようということであったが、個別のロッカーの鍵が揃っているか、プラザ側で確認し、改めて各グループに相談する、という説明を、事務所で受け、もう暫く現状のままだという。

「通訳と音訳の違い」はできあがり、原稿は岡田さんにお返しできた。岡田さんのお話では通訳についてはほとんど書かれていなかったとのことだが、このデータ作りに加わらなかつた他の人にもメールで送ることにした。わたしも興味があるのでこれから読ませていただく。

横浜から、「萬葉集」の校正が次々に届いており、お礼の言葉が岡田さんに届いている。そして、11月の東京の例会の日に、次の校正説明にYさんが見えになると報告があった。

「古語辞典」は、既に「け」の項まで岡田さんに届いているという。木村は岡田さんが「か、き」のフア

イルにしてくださいって、そのデータをいただいている。そして、「く、け、こ」で1ファイルにしてください。

「備える歴史学」のグループの組み合わせをした。ある方から、賛助会費をいただいた。Tさん、何時もありがとうございます。

12月の例会と学習会の予定日の相談をした。

新しい会員募集の方法について、Sさんが作ってくださったちらしの、ごく一部を書き改めていただいで、これをNさんに印刷していただき、各会員がそれぞれ、最寄りの図書館その他に、ちらしを置かせていただけるようお願いすることにした。

岡田さんが漢字の成り立ちについて説明した。Mさんが、8月の例会のときから参加された方のために、パソコン環境を整え説明して下さっていた。

* 予告

11月の例会(第108回) 11月12日(水) 13:30~15:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

10月の例会(第107回) 10月8日(水) 13:30~15:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

10月の学習会(第83回) 10月18日(土) 18:30~20:30

ヒューマンプラザ7階竹柴小ホール

11月の学習会(第84回) 11月22日(土) 18:30~20:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

12月の例会(第109回、10年目に入る)

12月10日(水) 13:30~15:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

12月の学習会(第85回) 12月20日(土) 18:30~20:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

わたくしごと

(以下、引用)

巻第一

雑歌(ざふか)

初瀬のの 朝倉の宮に 天の下 知らしめす 天皇
の代

「はつせのの あさくらのみやに あめのした し
らしめす すめらみことのみよ 「大泊瀬稚武天皇
(おほはつせわかたけのすめらみこと)」」

天皇の 御製歌

一

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岡
に 菜摘ます子 家告らせ 名告らさね そらみつ
大和の国は おしなべて 我れこそ居れ しきなべて
我れこそ居れ 我れこそば 告らめ 家をも名をも
「こもよ みこもち ふくしもよ みぶくしもち
このをかに なつますこ いへのらせ なのらさね
そらみつ やまとのくには おしなべて われこそを
れ しきなべて われこそをれ われこそば のらめ
いへをもなをも」

(伊藤博(はく)著、『萬葉集釋注』)

以前わたしは、この稿で『万葉集』について書いた
(羽化79号・2010年4月発行)。

そのときは友人に週に1回、おおよそ2時間ずつ、
詞書きも、歌の訳も解説も、訳注も語釈も、もちろん
白文の漢文も、ただ読んでいただくだけで、わたしは
歌のみを、しかも仮名書きで点字で書かせていただい
たときのことを書いた。歌のみを写し取ったとはい

え、8年を要した。大満足とは言えないけれど、当時としては精一杯のことで、書き終えた日のあの興奮は忘れられない。

ところが、今現在、横浜の皆様が伊藤博著『萬葉集釋注』を漢点訳し、東京の皆様が校正のお手伝いをしてくださったのであります。冒頭の引用は、その第1巻第一首である。

この原文は、万葉仮名で書かれている。対面朗読の形で読んでいただいていたときにも、主な言葉に使われている漢字を教えていただいていた。けれども今回、4巻まで漢点字データをいただいで、そのうちの第一首を見ているだけでもワクワクしている。とくに、原文の漢字を見ると、やはりこれは確かな「仮名読み」と解説が無ければ、万葉仮名は読めないと思っ

た。たとえば、

「籠もよ み籠持ち」は、原文では「籠毛與 美籠母乳」とあった。「掘串もよ み掘串持ち」の原文は、「布久思毛與 美夫君志持」となっている。「掘串」は、多分菜を取るために土を掘り起こすためのヘラのような道具ではないかと思うのだが、原文では二度目はことなる文字を使っているのはなぜだろう。とはいえ、それでもここまではわたしにも読めた。わた

しが読めなくて困った文字は、読み始めてすぐに出てきた。原文の、「岳尔」に当たるところを、本文に戻って読むと、「岡に」とある。わたしの心に「岳」が大きく広がった。

歌を暗唱していなければ原文を読みこなすのは苦勞する。この歌は、あやふやながら、おおよそ全部そらんじていたと思っただけに、「これは大変だ」と、当然な衝撃を受けた。

「やまと」という書き方も「山跡」という文字を見つけた。「大和」、「倭」だけではなかった。

わたしが最初に『萬葉集』に興味を持ったのは高校時代のことである。

国語の教師が、我が国の宝である『萬葉集』が教科書に、ほんの少ししかないことを残念に思ったように、点字製版、印刷ができる教師と組んで、巻1の1番の、「こもよ みこもち ふくしもよ みぶくしもち この おかに な つます こ いえ のらめ な のらさね …」を初めとして、おおよそ200首あまりを、各巻から主立ったものを選んで、プリントして配ってくださった。

わたしはこれまで古典に触れたことがなかった。ましてや古代の歴史など更に知らなかった。ただ、持統

天皇の「春過ぎて夏来たるらし白妙の衣干したり天の香具山」と読んだとき、「あれ？春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山、ではなかったかしら？」と、子供のころ遊んだ百人一首を思い出していた。するとわたしの疑問が、教師に伝わったかのようになり、「これは、少し言葉は替えられています、藤原定家が、小倉百人一首を編纂したときに、この万葉集から選んだものです。みなさんはカルタ遊びで知っていると思います」と説明してくださった。

だんだん読み進んでいくうちに、他にも、「あ、知っている」というのが何首も出てきて、次に配られる点字用紙10枚ほどのプリントが待ち遠しくなつた。

有間皇子（ありまのみこ）の悲劇、壬申の乱の話：大伯（おおく）の皇女と大津皇子の、姉と弟の深い愛情…。

香具山と、畝傍（うねび）山と、耳成山を擬人化し、畝傍山を女性と見立てて、香具山と耳成山が、畝傍山を取り合つたというけれど、昔から、今と同じようなことをしているものだ、というすこしユーモラスな歌、「香具山は 畝傍を惜しと 耳成と 相争ひき 神代より かくにあるらし いにしへも しかにあれこそ うつせみも 妻を争ふらしき」の歌など、次々と楽しみながら、K先生の話に聞き入った。先生はそ

の他、額田王（ぬかたのおおきみ）や、鏡の大君のこゝと、但馬（たじま）の皇女と、穂積（ほずみ）の皇子との相聞歌、など、歌に纏わる話とともに、彼らの歌の魅力について熱心に語られた。

「傘の郎女（かさのいらつめ）の歌が好き」、「わたしは大郎女（おおいらつめ）の歌が好き」、と女生徒たちは放課後にワイワイ語り合つた。

大伴旅人（おおとものたびと）の「酒をほむる歌13首」が配られて、その解説を聞いた日の午後は、男子生徒も加わり、話は盛り上がった。特にお酒好きな男子は、「俺は旅人を知っただけで万葉集の偉大さ、すごさを知った」などと妙な関心ぶりにわたしは興味を覚えた。

この高校時代に漢点字で『万葉集』を読んでいたら、もっと楽しかったであろう。けれども、わたしはそのころ漢字で読めるなんて夢のまた夢だと思つていた。

今回の「うか」百号では、わたしは漢点字で読み始めた『万葉集』を読み始めることができた喜びを、会員の皆様にお伝えし、まだ漢点字の世界を知らない人々に、ぜひぜひお勧めしたいと願うものである。

2014年10月1日 水曜

「報告と」案内

ご案内の通り、今号は本誌の百号に当たります。そこで改めて、現在本会が行っている漢点字訳のサービ
スについてご案内申し上げます。

一 定期刊行物

横浜漢点字羽化の会

1. 『うか』… D A I S Y版、E I B版、B M T版、本誌『うか』の音訳版及び電子データによる漢点字版です。墨字版の発行後、製作されます。季刊。

(無料)

2. 「横浜通信」… 漢点字版。短い読み物を収集して、オリジナルに編集します。漢点字習得者の触読のトレーニングに供していただきたく製作しております。横浜漢点字羽化の会の活動に先立って発行を開始して、現在に至っております。隔月刊。(無料)

3. 「朝日歌壇」… 漢点字版。朝日新聞に週一回掲載されている歌壇欄を、一カ月分をまとめて漢点字訳しています。漢点字習得者の読みの上達には最適の資料と考えています。横浜漢点字羽化の会の活動に先立って発行を開始して、現在に至っております。D A I S Y版もお届けできます。(6カ月分・3,000

円)

4. 「朝日俳壇」… 漢点字版。朝日新聞に週一回掲載されている俳壇欄を、一カ月分をまとめて漢点字訳しています。漢点字習得者の読みの上達には最適の資料と考えています。横浜漢点字羽化の会の活動に先立って発行を開始して、現在に至っております。D A I S Y版もお届けできます。(6カ月分・2,400円)

5. 「医療記事」… 漢点字版。朝日新聞と読売新聞に掲載されている健康記事のなから、最新の医療・健康に関する記事を、漢点字訳してお届けします。現在注目されている情報に、いち早く、漢点字を通して触れていただくことができます。(6カ月分・1,500円)

東京漢点字羽化の会

6. b e o n S a t u r d a y… 漢点字版。朝日新聞の土曜版に連載されているコラムを漢点字訳するものです。漢点字訳に着手した当初は、詩人の高橋睦夫さんの筆になる「花をひろう」、次いで「季をひろう」が連載されてきました。文学の香り豊かな文章に触れることができました。

残念ながら昨年3月を以てこの連載は終了し、4月

からはそれに代わって『武士の家計簿』の著者である磯田道史さんの「備える歴史学」が始まりました。あの3・11の災害を検証し、如何に自然災害による被害を最小限に留めるかを課題とした力作です。私達は、自然と折り合いをつける難しさを、あの未曾有の災害から学びましたが、いま同様の災害に見舞われたならば、うまく対処しうるかは、誠に分かりません。というより、取り分け今年は、自然の猛威の前に、身の竦む思いをさせられた年でした。自然に対する敬意を忘れぬようにしたいものです。

これも残念ながらこの9月を以て終了しました。前三タイトルは、それぞれ単行本にまとめられております。

10月からもコラムの連載は続きますので、漢点字訳してお届け致します。その姿はまだ明らかではありません。お待ちください。(無料)

以上、皆様からのご希望をお待ち申し上げます。

二 現在漢点字訳を進めている書物

横浜漢点字羽化の会… 伊藤博著『萬葉集釋注』(集英社文庫)、本年はその第三巻に着手しております。その内容は、巻第五・第六と、伊藤先生の解説です。

伊藤先生は、万葉集に収録されている歌を、一首ずつ個別に鑑賞するのではなく、歌をその並びと前後の歌とを関連させた、歌群として解釈し鑑賞することを勧められます。従ってその「釈文」に盛られているものは、歌の解釈ばかりでなく、その時代と人びとの関係に及び、ごく短い小説を読むような感を読者に与えます。

東京漢点字羽化の会… 大野晋他編、『岩波古語辞典』(岩波書店)。視覚障害者が書物に何かを求めるとき、まずその圧倒的な乏しさに直面します。なかでも辞書の類は、甚だしいものがあります。原因ははっきりしており、ここでは申すまい。

『古語辞典』を漢点字訳しようという計画は、正に地平線の向こうにあるゴールを目指して一步を踏み出すような戦きを感じさせました。現在その四分の一が完成し、道のりのおおよその見当がついて来た感があります。まとめ役をお引き受け下さっている杉田ひろみさんからファイルをいただきますと、徐々に形が整って、辞書らしい姿が見えて参ります。大変楽しみです。

以上、これまでに製作した漢点字書も含めて、ご希望をお待ち申し上げます。

編集後記

▼とうとう「うか」が100号を迎えました。創刊号が1997年4月の発行ですから、丸17年を超えています。結果的に私の編集担当期間は半分を超えてしまいました。この機関誌の体様を決めて継続的な発行形態を作ってくれたのは、初代編集担当の宗助さんです▼編集者にとって最も重要なものは執筆者の確保です。最初の頃は、一般会員も一生懸命原稿を書くことを心がけて頑張ってくれましたが、一通り活動内容や感想などを文章にして、それが終わるとほとんど書きたいような内容がなくなってしまう▼岡田さんが内に秘めた漢点字に対する執念は大変なもので、そのエネルギーが本誌の継続的な発行を可能にしています。しかし、彼1人では誌面全体を埋めることはできず、それを継続的に支えてくれたのが現在はいひさふね図書館におられる山内薫さんと、ご自身視覚障害者である木村多恵子さんです。木村さんは熱心な漢点字使用者で、毎号本誌に現れる非常に繊細な文章に心を洗われる思いがするものです▼更に、今回原稿をいただいで初めて知ったことですが、田中秀臣さんの文字に対する思いが、岡田さんの思いと同じことに驚き、こういう方がおられるということをとて心強く思います▼これからも本紙が末永く発行され続けることを心から願っています。

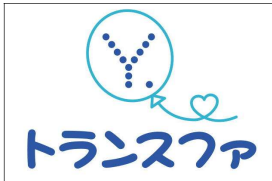
木下 和久

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は1月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。